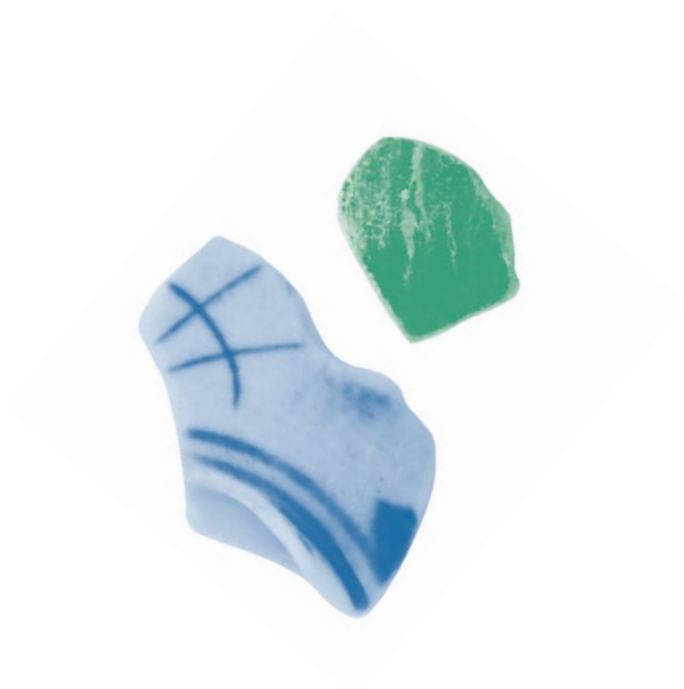


Figures



2025年 4 月号 (No.1)

Perdu ce vin, ivres les ondes !...

J'ai vu bondir dans l'air amer

Les figures les plus profondes...

Paul Valéry "LE VIN PERDU"

目 次

季節を運ぶ風

節分の鬼遣らい 2

ファシスト的公共性 3

短歌 エチュード（一） 遠 藤 雅 樹 5

中島敦「虎狩」論 角 谷 有 一 8

——再読から見えてくるもの——

近現代の短編小説を読む

第1回 志賀直哉「焚火」 角 谷 有 一 26

編集後記 34

装画：平尾堇

季節を運ぶ風

節分の鬼遣らい

真青な柊挿せる軒端かな

追儺会のこの雑踏に鬼もゐる

草の戸の開いて洩る灯や鬼やらひ

山口青柳

塩川雄三

松本たかし

節分を詠んだ俳句は多い。立春の前日で、冬から春への節目を感じさせる日だからだろうか。節分に、豆を撒いてさまざまな禍をもたらす鬼を追ひ払う「追儺」の行事が定着したのは室町時代だという。家の門に鯛の頭を刺した柊の枝を飾って鬼が近づけないようにするという風習も昔はいろんな地域で見られた。昭和が終わる頃までは、節分の夜には、どこからか「鬼は外、福は内」と、親子で豆を撒く声が聞こえてきたものだが、最近ではそんな声を聞くこともあまりなくなつた。

今年の節分は二月二日だと気づき、慌てて吉田神社の節分

前日祭に出掛けた。夜の追儺式には何万人もの人が集まるので、まだ日が高いうちに吉田神社へ向かう。

参道の途中に京都大学の正門がある。その参道には、何列もの屋台がテントを並べ、人気の店には行列もできている。

屋台は、吉田山の中腹の末社にまで途切れることなく続いている。参拝の人や屋台を覗く大勢の人をかき分けて参道をゆつくりと上り、本社の前に出る。本社には、節分当日、火炉祭の高く舞い上がる炎の中で焼き納められる古いお札やお守りや追儺矢が大きな火炉の中に積み上げられている。

本社に参拝した後、屋台が並ぶ山道を上って大元宮（だげんぐう）に向かう。大元宮は、八角形の社殿に入母屋造りの茅葺き屋根の美しい姿だ。社殿を中心に、左右に全国六十余国三千百三十二座の神々が、細長い二つの社殿に祭られている。ここには八百万の神々がすべて祭られているということで、明治になるまでは吉田神社の信仰の中心だったそうだ。節分の三日間だけ参拝者に社殿の中が公開されるので、社殿の前には長い行列ができていく。後ろから押されるのを我慢して、列に並び、一列ごとの参拝の順番をじつと待ち、やつとのことでお参りを済ませて振り返ると、慶長年間に再建された茅葺き屋根の社殿が参拝の人々の喧噪を包み込んで静かにゆつたりと佇んでいる。

追儺式では、大元宮を出発した三匹の鬼たちが吉田神社の本殿まで下りてきて、そこで、「方相氏（ほうさうし）」と呼ばれる、鬼を

退治する神に追い払われるという古式に則た追儺の神事が行われるのだが、その時間にはまだ早いの、見物の人たちが続々と押し寄せてくる。その雑踏を避けるようにして参道を外れた山道を通って、早々に神社を後にする。

翌日の夜、吉田神社でいただいた福豆を小さな升に入れ、我が家で静かに豆を撒く。「家ごとには儺やらふ声ぞ聞ゆなるいづくに鬼のすだくなるらむ」とは、江戸後期の歌人、香川景樹の歌だ。今では家の門に柵も挿さず、豆撒きをしない家庭も多いので、きつと鬼たちの集まれる家もあるに違いない。それでも、節分は鬼たちにとって、やはり、苦難の日。鬼の悲しさがふと胸をよぎる中、ゆっくりと節分の夜は更けていく。

(乾)

「ファシスト的公共性」

NKHの「映像の世紀」でゲッベルスを取り上げている番組を見た。その生い立ちからヒトラーの片腕として弁舌の才を遺憾なく揮った扇動家としての風貌や、最期までヒトラーに忠誠を尽くした自死までを伝記風にまとめたもので、特に

目新しい発見はなかったが、プロパガンダと示威行動とドイツ共産党やユダヤの人々と対峙したナチス突撃隊の暴力が大衆の熱狂を育んでいくプロセスがよくわかった。

佐藤卓己は『ファシスト的公共性』のなかで、プロパガンダとは宣伝の徹底した民主化であると書いている。「宣伝はすべて大衆的であるべきで、その知的水準は最低レベルに調整すべきで、獲得すべき大衆の人数が多くなればなるほど、知的レベルをますます落とすべきである。」(ヒトラー「我が闘争」)

ヒトラーは、あるいはゲッベルスは、街頭運動や国民ラジオを通して「宣伝」を「扇動」のレベルまで引き下げること、で「宣伝」を民主化した。民主化されたファシストのプロパガンダは、購買力の最低レベルに合わせて制作され流通するアメリカ商業広告の手法に酷似する。そこにナチスの創見があった。

大衆が国民として政治に参加する可能性を視覚的に示すと、国民の意思を街頭の歓呼や喝采により民主主義的に表明すること、政治の決定プロセスに自ら参加したと感ずること、それが大衆民主主義の原点である。ヒトラーは「黙れ」といったのではなく「叫べ」といったのであり、ヒトラーは国民に政治参加を求める民主主義者であったがゆえに当時のドイツ国民に圧倒的に支持されたのだというのが佐藤卓己の診断である。

ここで思い浮かべるのは、二十一世紀のファシストともい
うべきひとりの男のことである。連邦議事堂襲撃事件から暗
殺未遂を経て大統領選で圧勝したトランプ大統領の軌跡は、
ミュンヘン蜂起から国会議事堂放火事件を経てナチスの政權
奪取に至るプロセスを嫌でも思い起こさせる。トランプ大統
領の単純な言回し（メイクアメリカグレートアゲイン）や、
大衆を前にした時の大統領らしからぬ奇矯でコミカルな振舞
いは、誰に向けられた「プロパガンダ」なのだろう。

米国が抱えている深刻な格差問題が「ラストベルト」に代
表される負け組の行き場のない情念に火をつける。両親の世
代はＵＳスチールやフォードで働き早期引退してフロリダで
ゴルフ三昧の豊かさを謳歌できたが、俺達は親世代の生活水
準に到底及ばない、なぜこうなったのだ、マイノリティはな
ぜ俺達よりも優遇されるのだ、公平といえるのか、LGBT
だつて？ キリスト教の教えは何処に行つたのだ、メキシコ
国境から大挙して押しかける連中がいる、俺達の富が収奪さ
れるのを、指をくわえて見ているというのか、イラクやアフ
ガンで俺達は誰のために戦つたのだ、何のために戦つたのだ
…。

仕方がないことはわかつている、でももうたくさんだ、ア
メリカは彼らのものじゃない、俺達の国なんだ。いたるところ
で露呈してきた「ラストベルト」に伏在する情念をトラン
プは煽り掻きたてる。そこにトランプを支持する衰えない源

泉がある。米国だけでなくIT革命でグローバル化を押し進
めた資本主義先進国は同じような問題を抱えている。病根は
深く危機的である。ただ私はトランプ問題には比較的樂觀的
だ。「歴史は繰り返す。一度目は悲劇であるが、二度目は喜
劇である」（マルクス）

二十一世紀の喜劇の幕は上がった。トランプ大統領は貫禄
と厚顔で千両役者に違いない。舞台はホワイトハウス。脇役
にも事欠くことはない。火の粉を浴びながらの観劇ではある
が、傾きはじめたバクシアメリカーナの壮大な落日を、ゆつ
くり見届けようではないか。

（坤）

エチュード（二）

遠藤雅樹

亡きひとと思ひし春もおぼろにて忘れることのむなしさに敢^あう

満ちることなき豊饒の海翳りゆき非命の人の否む世を生く

行きあう人皆あてのあるように歩めり我もあてあるように歩みゆく街

暢やかに後方ふりかえる馬の首千年前も振り返りしか

山腹の共同墓地に風立ちぬ死者ら円居て憩う静けさ

うつせみの命の果てのすすき野の金波に映える泉あるべし

白牡丹闇夜に揺れて近づきぬ夢醒めてのち残る花の香

寢息静か闇に四千の日と夜あり重ねし齟齬の果ての薄明

歩行者天国といへどサ・セ・パリは巴里の唄ラ・マルセイエイズはパリの歌

矢を放つギリシャ戦士の艶やかな頬を伝わる血の色黒し

線になり円になりして跳る色彩カンバスの枷いつか覚えず

雲降る夜の小道に漏れ聞こゆフルトヴェングラ―指揮ブラームス四番

水あかり黄昏ゆく橋の上で口ずさむ我がスイートメモリーズ

でももし猫が頬かむりして出てきたら 灯りを消して きよしこの夜 silentnight holynight

春風に御室の桜散りまがふ今日ただ花の盛りなりけり

端居して雲の行方を眺めおり来し方行く末かくの如しも

金鰐の包みむく指とまりけり垂乳根の母は居眠りたまへり

* * *

亡きひとと思うたつきに暮れなずむ愛恋深かな久米の里うた

中島敦「虎狩」論

——再読から見えてくるもの——

角 谷 有 一

はじめに

中島敦の生前に刊行された二冊の作品集、『光と風と夢』と『南島譚』の中で、唯一、彼自身が少年期を過ごした日本統治下の朝鮮を舞台とした作品が「虎狩」である。

本稿では、作品の成立事情や構成、さらには、作品内の時系列等を探りながら、「虎狩」というタイトルのもとで、「私は虎狩の話をしようにと思ふ」と語り始めた語り手の「私」が、朝鮮の小学校で知り合った「半島人」（『朝鮮人』の友人、趙大煥との約四年あまりの交流の思い出を語った後で、趙の父親に連れられて行った虎狩のエピソードを語るといふ物語を通して、何を描き出したのか、また、何を描くことができ

なかったのかを明らかにし、さらには、最後の「七」で、趙大煥の失踪から十数年過ぎた「今」、この物語を語り始める三日前に、偶々本郷で趙と再会したというエピソードは、趙大煥をめぐる「私」の回想の物語とどのような関わりがあるのかという点も併せて探ってみたい。

一 作品の成立事情をめぐって

「虎狩」は、昭和九（一九三四）年一月に雑誌『中央公論』の新人募集の呼びかけ（「創作」部門）に応募して選外佳作となった作品である。当選の四作品は同年七月発行の同誌の「臨時増刊新人号」に掲載されたが、佳作十作のうちの八番目だった中島敦の「虎狩」は、題名と作者名だけが発表され、作品が掲載されることはなかった。

この作品の成立時期については、郡司勝義^{チカ}が、『中央公論』の原稿募集の締め切り時期を根拠に「昭和八年の末から、おそくとも昭和九年の四月三十日までと推定」できるとし、木村一信^{ハツシ}も、その説を「ほぼ妥当だといえよう」と述べていることから、これまで、中島敦の初期作品として扱われることが多かったが、この時に応募された作品の原稿は、現在その所在が明らかでないために、昭和九年に佳作となった「虎狩」の原稿と現在我々が目にする「虎狩」との間にどれほどの異同があるのかを明らかにすることはできない。

以上の点も含めて、この作品の成立過程については、山下

真史が詳しく検証している。

山下によれば、「今日残されている原稿は、横浜高等女学校の中島の教え子、鈴木美江子氏（昭和十六年卒業）の浄書に中島が加筆訂正したものであり、「中島が鈴木氏に初めて浄書を頼んだのは葉書から昭和十四年七月二十三日と推定される」と論じている。このように推定した上で山下は、『虎狩』には、昭和九年四月三十日頃までに完成し、『中央公論』に投稿した第一稿があり、その後、昭和十一年六月以前に自分で浄書して深田久彌に閲覧を乞うた第二稿があり、先ほど引用した鈴木氏に浄書を依頼した第三稿。さらに、昭和十七年七月までに第三稿に加筆訂正して、単行本『光と風と夢』に収められたものという四つの原稿が存在したと推定している。その上で、私たちが現在読んでいるのは、「第四稿」であると指摘したのである。

このように、山下によつて検証された「虎狩」の成立過程を踏まえて、その成立時期については、藤村猛や楠井清文、さらには、ボヴァ・エリオらが、それぞれ根拠を挙げて考察しているが、いずれも、現在私達が目にするこの作品が、『中央公論』に応募された作品に、その後手が加えられて成立した作品である可能性を示唆している。

この作品の応募後の改稿については、現在、確認することができないが、中島敦自身、『中央公論』に応募して佳作になって以後も作品に手を入れ続け、彼の第一創作集に収録す

るほどに愛着を持ち続けていた作品であるという論者らの指摘には説得力がある。

それゆえ、ここでも、「虎狩」を中島敦の初期作品としてではなく、作品を応募した後も八年間かけて改稿しながら完成させた作品として読んでいきたい。

二 「虎狩」という作品の構成について

「虎狩」という小説は、「一」から「七」という漢数字の見出しがつけられた七つの部分から成り立っている。そして、全編、作者中島敦を思わせる、「私」という、登場人物でもあり、語り手でもある男の、回想の「語り」によつて構成されている。作品の構成について考察していくに際して、「一」から「七」の回想のなかの出来事がどのような順序で、また、どのような関わりを持って語られているかを見ておきたい。

「一」では、物語の冒頭、「私は虎狩の話をしようと思ふ」という一文から語り始められる。しかし、「私」は、すぐには虎狩の話をするわけではない。まず、物語を語っている時点から「二十年程前」のことだと断つて、当時は京城付近でも虎が出没したという過去の事実を語り、ある晩、駐在所に二頭の虎が現れて、入り口の硝子戸をガリガリ掻くのを目にした巡査がうろたえて、「ぶる／＼顫へてゐた」という記事をも、「少年の私」が「京城日報」という新聞で読んで、「をかくして／＼仕方がなかった」という思い出を語って、読者を、

二十年前の朝鮮の京城という物語の舞台へと連れて行く。

「二」でも、冒頭、語り手の「私」は、「さて、虎狩の話の前に、一人の友達のことを話して置かねばならぬ」と、まるで虎狩の話をするためには欠かすことのできないことであるかのように、「私」が「内地」（＝日本）の小学校から当時日本統治下にあった朝鮮の小学校に転校して来てすぐに喧嘩をきっかけに親しくなった趙大煥という「半島人」の友人との出会いについて語る。ここで語られるのは、喧嘩の相手の趙が、無抵抗で、「案外弱」かったことであり、その後、趙が「半島人」であることに「私」が気付いて戸惑ったが、そのことを趙自身は全く気にしていないように見えたということだ。しかし、実は、趙が「半島人」であることを気にかけていたことを「後になって」知ったのだと、付け加えて語る。

その後の、「三」から「五」までは、こうして知り合った「私」と趙大煥との四年あまりの間のいくつかのエピソードが語られるのだが、読者は、「二」の冒頭で書かれていたことを改めて思い起こすはずだ。これらの出来事も「虎狩の前に」「話して置かねばならぬ」ことなのだと。

「三」では、小学校の終わりから中学にかけて趙が一人の少女のことを慕っていたエピソードが語られるが、ここでも、趙が「半島人」であることを気にかけていたのだということを読者に伝えている。さらに、「虎狩に出掛けたのは丁度其の頃のことだ」と語りながら、また、「虎狩は後廻しにして」

と、その後の趙と「私」との交流についての思い出を語り続けるのだ。ここでも、まだ虎狩の話は語られない。

「四」では、それからしばらくして中学生になった頃のことか、三越で陳列されている熱帯魚を見に行くように趙に誘われたエピソードが語られる。熱帯魚の美しさを自慢して、「私」に得意げな様子を見せる趙に対して、「私」が日本の金魚の美しさを自慢するのだが、趙は憫笑するとともに、「私」に抗議して、一週間口をきかなかったというのだ。語り手は、ここでも、趙が「私」にこのような態度を取ったのは、彼が「半島人」であることを気にかけていたからではないかと読者に示唆しているのである。

「五」では、今の「私」が、この後の趙との付き合いの中で記憶に残っていることとして、中学三年生の冬、発火演習に行ったときに、日頃から上級生ににらまれていた趙が上級生とトラブルになり、夜中に上級生達に殴られた事件が取り上げられる。上級生達の暴行が終わった後で、「私」は趙のそばに行き、彼の話聞き、「強いとか弱いかつて、一体どういふことだらうなあ」と言って泣きじやくる趙を、慰めようとするのだが、この事件の直後に、趙は失踪してしまうのだ。やがて、彼に関するさまざまな噂が聞こえて来るが、はつきりしたことは何一つ分からないまま、「私」は中学を終えると、東京の高等学校に入学するために日本に帰ったと語られる。

「六」で、ようやく、趙と「私」が「虎狩」に行ったとき
のことが語られる。それは、趙の失踪の二年ほど前の出来事
で、物語の時間は少し逆戻りして、「私」が親にも嘘をつい
て虎狩に連れて行ってもらった日のことが語られる。ここで
は、虎を仕留めた後に、趙大煥が示した意外な行動を目にし
て、「私」の彼に対する見方が変わる出来事が描かれている。

「七」では、趙の失踪から十五、六年を経た東京でのこと
として、趙大煥との奇妙な再会が語られる。趙大煥だと分か
りながら、旧友としての趙大煥と言葉を交わすことなく別れ
たのであり、それが、物語を語り始める三日前の出来事で、
この経験が、「私」に、趙大煥との思い出を語らせるきつ
けになったと読者に伝えて、物語が閉じられる。

以上のように展開する小説の構成について整理しておこ
う。

第一に、「二」から「七」という見出しがつけられた、七
つの部分から構成されているこの作品は、最後の「七」で、
「語り手」の「私」が、趙大煥と思われる男に、三日前、東
京で偶然再会したのをきっかけとして、そこから折り返して、
二十年前から数年間の植民地朝鮮での少年時代に経験した出
来事を、「二」から「六」で回想して語るといふ、一人称回
想形式の、「粹小説」であるということである。

第二に、「虎狩」というタイトルのもとに小説が始まり、「私
は虎狩の話をしうと思ふ」と語り出しながら、虎狩の話が

すぐには語られず、虎狩の話の前に、当時友人だった趙大煥
と「私」との四年間あまりの交流の中でいくつかのエピソ
ードが語られ、その最後に虎狩の話が語られていることであ
る。その際、それぞれのエピソードの中で、趙大煥が、自身
が「半島人」であることを気にかけていたと、そのことに必
ずのように触れていることも付け加えて起きたい。

三番目に、二番目のことと関連して、「私」によって語ら
れる、「二」から「六」の少年時代の回想が、自然な時間の
順ではなく、「四」と「五」の、実際には虎狩よりも後の出
来事が、時系列を入れ替えて虎狩のエピソードよりも先に語
られることだ。

このような小説構成の特徴については、これまでも多くの
論者によって肯定的、あるいは、否定的に論じられてきたが、
いずれにしても、時系列を入れ替えてでも、虎狩のエピソ
ードを語る前に、「二」から「五」の「私」と趙との交流の中
でのエピソードを「話して置かねばならぬ」と考えて、語り
手が自然な時間の順序を入れ替えて語ったという点が、この
作品の構成上の大きな特徴であることは間違いない。

三 「語り手」の「私」について

前節で、この小説は時系列の順序にしたがって書かれては
いないことを確認した。「五」の、「私」と趙大煥とが中学三
年生の発火演習で経験した出来事が語られた後、「六」では、

時間を二年ほど遡って、虎狩のエピソードが語られている。語り手は、虎狩について語るために「話して置かねばならぬ」こととして、「二」から「五」の趙大煥と「私」との交流のエピソードを、時間の順序を入れ替えて語ったのだ。その構成の意図について考察することと併せて、そのような順序で語る「語り手」の「私」についても探ってみることにする。

この小説の「私」の語りによる回想が始まるのは、「七」で「私」が趙大煥と奇妙な再会をしたのがきっかけだったことは、語り手が次のように書いているところからも明らかだ。「実は私は彼に逢つたのだ。しかも、それがつい此の間のことだ。だからこそ、私もこんな話を始める気になつたのだが、」と。「私」がこの回想の物語を語り出す三日ほど前、それが趙大煥だと気づかないままに彼と出会い、趙大煥だと気づいて、少年時代の虎狩や熱帯魚や発火演習のことを思い出した時には、彼を、「大東京の人混みの中に見失つて」しまった後だったというのだ。それから三日後、「私は虎狩の話をしようと思ふ」と、この物語を語りはじめるのだが、少年時代の趙大煥との思い出を語り出すときに、なぜ、「私」は虎狩のことから語りはじめたのか。さらに、そう語りながら、「二」の冒頭で、「虎狩の話の前に一人の友達のことを話しておかなければならぬ」と断らなければならなかったのはなぜなのか。

それは、虎狩という、「私」の記憶に強く残っている出来

事を焦点として、十数年前の朝鮮での趙大煥という一人の「半島人」との交流にはどのような意味があつたのかを、もう一度しっかりと確かめ直すためだったのではないか。「七」で描かれた、三日前の、それが趙大煥であると確認し合うことなく語り合った趙と「私」との再会が、「私」に与えた衝撃が、彼とともに رفتった虎狩の日の記憶を呼び起こし、その虎狩で目にした趙大煥の行為が、彼が「私」に隠し続けていた心の奥深くに抱え込んでいた思いの表れであつたことを、小学校五年生での彼との出会いからその四年後の突然の失踪による別れまでの記憶と重ねて思い起こすことによつて、少年時代の友人であつた趙大煥という人物を、改めて捉え直そうとしたのではないだろうか。

では、このような構成を持つ「虎狩」という小説をどう読めばいいのだろうか。

この物語を語り出す三十歳前後の現在の「私」の目を通して語られる、改めて捉え直された趙大煥像と、二十年近く前、趙と出会い、それから数年間、彼の友人として過ごしていた時に「私」が見ていた趙大煥像、さらに、趙大煥との思い出を語る現在の語り手の「私」には捉えられないか、あるいは、捉えたことをあえて語らない「私」の記述の向こうから「私」の「語り」を越えて、読者の中に浮かび上がってくる趙大煥像。この三つの趙大煥像を読み取ることが、この作品を理解するために重要なのではないだろうか。

昭和十年代という、日中戦争から太平洋戦争に至る時期、植民地朝鮮を舞台にした小説には厳しい検閲がなされていたはずだ。その中で、中島敦が、数年前に『中央公論』に応募して選外佳作となった作品を彼の第一作品集に収めたのは、そこに強い思いがあつたからに違いない。

語り手の「私」は、趙大煥という朝鮮人の友人との交流の思い出の中の出来事を、十数年後の再会をきっかけに改めて思い起こし、それを現在の眼を通して再構成することによって、日本統治下の朝鮮で生きる植民者の子弟である「私」と、元は朝鮮の支配層であつたが、被植民者となつて「両班」の子弟である趙大煥との関係を探り、そこから浮かび上がってくる二人の、埋めようのない深い溝の存在を露わにしようとしたのではないだろうか。さらに、「私」の「語り」を越えて、「私」が「今」も抱えている、「半島人（朝鮮人）」に対する偏りとゆがみを持った眼では見えなかった、当時の趙大煥が心の内に抱えていたものを、読者に読み取らせようと意図しているのではないだろうか。

四 「虎狩」というタイトル、あるいは、「虎狩」の意味するもの

では、趙大煥との交流の思い出を語ることが物語の中心になつてゐる作品に、なぜ「虎狩」という題名が附けられてゐるのか。また、虎狩という出来事はこの作品の中でどのよう

な意味を持つてゐるのだろうか。

「虎狩」というタイトルについては、早く、鷲只雄^{きさ}がその論の中で、「この小説は表題から普通に想像されるように、虎狩の冒険談、乃至は危険と好奇に満ちた珍奇な体験を語る、言わば虎狩奇譚をその内容としたものではない」と指摘した上で、『虎狩』の語が読者に喚起するイメージの効果を最大限に利用しつつ話を進める作者の手際の鮮やかさに作者中島敦の巧妙さを見ている。また、作品の内容と「虎狩」というタイトルとの関係について、正面から取り組んだ論考に南富鎮^{なふちん}の論があるし、楠井清文^{きよふみ}は、「随所に挿入される「虎」のイメージの系列が、読者の注意を持続させると共に、「私」の植民者としての視線の有り様を浮かび上がらせる」点を指摘している。

これらの先行研究でも指摘されているが、この作品のタイトルともなつてゐる、「私」が経験した虎狩というのは、作品の中でどんな意味を持つてゐるのかを探ってみよう。

「六」の冒頭では、「さて、ここで、愈々本題に戻らねばならぬ」と語る。あくまでも虎狩の話が「私」の回想の「本題」であることを読者に確認して、この出来事が「趙が行方にくらます二年程前の正月、つまり私と趙とが、例の、目の切れの長く美しい小学校の時の副級長を忘れるともなく次第に忘れて行かうとしてゐた頃のことだ」と、それが「三」で述べたエピソードに続く時期のことであることを読者に示し

ている。

読者は、「一」から順を追って「五」まで読んできたのだから、趙大煥がこの虎狩から二年程後に「五」に書かれていた出来事を経験して、「私」の前から姿を消し、失踪したことを知った上で、「六」を読み始めるのだ。また、「五」の後半、趙が「私」に語った、「強い、弱い」という言葉に、「私」が「内地人ではない、半島人の、彼」を見ていたことも読者は分かった上で、この虎狩のエピソードを読むのだ。

まず、虎狩に出掛ける前のこととして、ある日の学校帰りに趙大煥から虎狩に行かないかと誘われたときのことを語る中で、「私」は趙の家庭について次のように語っていることを確認しておこう。

趙の父親は元来昔からの家柄の紳士で、韓国時代には相当な官吏をしてゐたものらしい。さうして、職を辞した今も、いはゆる両班^{ヤンバン}で、その経済的に豊かなことは息子の服装からでも分った。ただ趙は——自分の家庭での半島人としての生活を見られたくなかつたのであらう——自分の家へ遊びに来られるのを嫌つていたので、私はつひぞ彼の家へ——その所在は知つてゐたが、行つたことはなく、従つて彼の父親も知らなかつた。何でも虎狩へは殆ど毎年行くのださうだが、趙大煥が連れて行かれるのは今年が始めてなのだといふ。

「私」が語っているのは、趙の父親が韓国独立時代には国政にかかわるような官吏だったが、日本統治後は職を辞した、誇り高い両班貴族だということであり、そんな環境の中で趙自身が「半島人」としての生活を「私」に見られたくない、その時の「私」が想像していることだ。ここからも、趙が「半島人」としての自身に劣等感を感じていると、「私」が解釈していることが読み取れる。また、趙の父親が快く「私」を虎狩に連れて行つてくれるのと対照的に、「私」の父が「自ら常に日鮮融和などといふことを口にしてゐたくせに、私が趙と親しくしてゐるのを余り喜んでゐなかつた」と語り、教育者である父も、その言葉とは裏腹に、日本統治下での「半島人」に対する差別意識を持つていたことが語られている。ここまで見てきたように、虎狩に出掛ける前の段階で、趙と「私」の間に「内地人」と「半島人」との溝があること、さらには、日本統治下でその社会的地位を大きく変化させられた両班貴族の子弟である趙大煥の、「半島人」としてのゆがめられた自負心を抱えているに違いないところが描き出されている。

実際に「私」が虎狩に出掛けて目にした出来事について見ていく前に、もう一つ注意しておきたいことがある。土曜日の午後、駅で趙が父親に「私」を紹介する場面で、趙は父親に「私」のことを「中山君」と紹介する。「私」は、作者中

島敦とは別人の、作品世界の中の虚構の人物「中山君」として登場するのだ。作者は、あえて虚構の人物を作り上げて、「中山君」という「私」の視点が、作者の視点とは違い、また、全知の視点でもない、一登場人物の、偏りもあり、限定されてもいる視点であることを示している。それと同時に、作者中島敦を想像させるこの「中山」という名前は、中島の横浜高等女学校時代の私生活をモデルとした、「無題」と題された未完の作品の中で、作者を思わせる登場人物の名前として使われていることで、モデルである中島敦自身の境遇と重なることも暗示しているのである。

以上の相反する二点からは、まず、語り手の「私」＝十数年後の「中山君」は、作者中島敦ではなく、虚構の登場人物として設定されており、「私」という語り手の持つ偏りや「私」には見えない部分があることを読者に見せる仕掛けになっていることが分かる。

また、「中山君」に「中島君」を重ねて、作者自身の朝鮮での体験と物語の中の出来事の時間を重ねて見ることができるよう構成されていることも分かるのだ。「私」が内地から京城の龍山小学校に転校した時期を、中島のそれと同じ、一九二〇（大正九）年の九月と重ねて読んでいいと読者に思わせているのである。そのように仮定すると、趙が失踪した中学三年生の冬は、一九二四（大正一三）年から一九二五（大正一四）年にかけてのことであると想定することができる。

また、それから一五、六年後、「私」が東京で趙大煥らしい男と遭遇するのは、一九三九（昭和一四）年から一九四一（昭和一六）年ごろだと推定できる。このように捉えたと、「私」が経験した虎狩は、一九三一（大正一二）年頃のことになる。さて、いよいよ、虎狩の当日の夕方四時に、趙の父親とその友人、趙大煥と「私」、そして、「主人達の防寒具やら食料やら弾薬などを荷つた男」の五人は、汽車に乗り込んで虎狩に出掛ける。その間も趙は大人達とほとんど口を交えることなく、「私」と二人きりで日本語で話し続ける。その理由を、語り手の「私」は、「趙は私の前であまり朝鮮語を使ふのを好まないやうであつた」と、趙が「半島人」と「内地人」という問題にくよくよ心を悩ましていたためだと推測している。

汽車が山地に入り、雪の積もる小さな駅に着いたのは午後七時を回った頃だ。この後で「私」が実際に目にした虎狩の光景について、ごくあっさりと言られる。

雪の山道をそれから三時間も歩き、さらに、その足跡を見つけた虎の出現を待つて樹上に作られた機敷で寒さに耐えて何時間も待つているうちに、「私」はひどく眠くなり、うつらうつらし始める。そんなとき突然虎が現れ、たまたまその近くにいた一人の勢子が虎と遭遇するのだ。虎がその勢子の前に前足を上げて進み出たとき一斉に銃が撃たれて、虎は倒れる。その一瞬の出来事を「私」は目にするのだが、実は「私」

がここで語ろうとするのは、その後の趙大煥の振る舞いだ。それを讀んだ読者は、「一」から「五」までの物語の中で語られてきた趙大煥の「弱さ」とはあまりにかけ離れた彼の態度に戸惑いを感じるのではないか。趙は、「氣を失つて倒れてゐる男の所へ来ると、足で荒々しく其の身体を蹴返して見ながら」「——チョツ！ 怪我もしてゐない。——」と言つて、氣絶した男を足でなぶるのだが、そんな趙の振る舞いに「私」は、「彼等の中を流れてゐる此の地の豪族の血を見た」と感じ、彼の酷薄な表情を眺めながら、そこに「終りを全うしない相」を見て取るのだが、この時の「私」には、趙大煥がなぜそんな行動をするのかが理解できていないのだ。

「七」では、三日前に趙大煥と思われる人物との偶然の出会いをきっかけとして、今、十数年前に趙大煥とともに行つた虎狩で目にした趙の振る舞いを思い起すことによつて、改めて、趙大煥と「私」との関係がどのようなものであつたか、また、この友人がこの時どのような思いを抱いていたのかを捉え直すとしてゐるのだ。その意味でも、この作品のタイトルは「虎狩」と名付けられねばならなかつたのであり、この虎狩のエピソードが作品の中心に置かれねばなかつたのである。

五 日本統治下の朝鮮とそこで暮らす日本人を趙大煥はどう見ていたか

前節でも少し触れたが、語り手の「私」によつて語られる、朝鮮での趙大煥と「私」との交友の時期が、一九二〇（大正九）年から一九二四（大正一三）年頃であり、この二人が一五、六年後に再会するのが、一九三九（昭和一四）年から一九四一（昭和一六）頃だとすると、趙大煥が「私」に語る言葉や、その行動が、日本による朝鮮支配の時代背景と密接にかかわっていることに氣付くはずだ。「二」の冒頭で、「私」は趙のことを次のように語っている。

その友達の名は趙大煥といつた。名前で分るとほり、彼は半島人だつた。彼の母親は内地人だと皆が云つてゐた。（略）兎に角、彼は日本語が非常に巧みだつた。それに、よく小説などを讀んでゐたので、植民地あたりの日本の少年達が聞いたこともないやうな江戸前の言葉さへ知つてゐた位だ。

「私」は、趙大煥のことを日本語を巧みに話す「半島人」として描いてゐるのだが、日本語を巧みに話し、日本の小説や日本人の書いたものを讀む機会が多かつたに違いない趙大煥は、当然、この時期の朝鮮や朝鮮人が日本国内でどう見られ、どう語られていたかということに、「私」以上に関心があり、「私」以上に精通してゐたはずである。その前提で、二人の交友の時期を見直してみると、「私」が初めて趙大煥と出会つたのは、転校してすぐの一九二〇年の秋だと考えら

れる。そして、趙が一人の少女を慕っていたのが、一九二二年の初め、さらに、その年の冬、虎狩に誘われ、その少し後に二人は京城の三越のギャラリーで熱帯魚を見ている。さらに、私と趙が中学三年生の一九二四年十一月末に学校から発火演習に出掛け、そこで趙が先輩達に殴られるという事件が起こり、そのすぐ後に趙大煥は失踪してしまうのだ。

ところで、二人が出会った一九二〇年というのは、その前年の三月に大規模な独立運動となる「三・一運動」が起こり、数千の学生のデモが、市民を巻き込んで数万人に膨れ上がり、運動がその後全国に広がる年だ。これに対して朝鮮を統治する朝鮮総督府は、警察と軍隊を動員して鎮圧に当たった。このような武力鎮圧によって数ヶ月にわたる独立運動は完全に押さえ込まれたのだが、この運動は、その後の日本の朝鮮統治にも大きな影響をもたらした。これをきっかけとして「武断統治」から「文化統治」へと日本の朝鮮統治の方針は表向き変更されたが、植民地支配の内実はそれまでと変わらず、むしろ、このような運動が次に起きないように、統制はより厳しくなったとも言える。

「私」が朝鮮の龍山小学校に転校してきたのは、その「三・一独立運動」が鎮圧され、「武断政治」から「文化政治」へと変更され、言論の自由が一部認められ、朝鮮の新聞や雑誌が再び発行が許可された時期であるが、この時期について、高崎宗司はその著書の中で次のように述べている。

総督府は、「文化政治」の陰で、「治安第一主義」を標榜し、警官の一大増員を図った。（中略）一面（町村にあたる）に一駐在所を目標に、一五〇〇人は日本から転任させ、三〇〇〇人は新たに日本で募集した。（略）こうして合計四五〇〇人の警官が朝鮮に渡っていった。二七年、警察官の数は一万一二九人になった。

これが「私」が小学校から中学に掛けて朝鮮で過ごした時期の出来事である。また、「私」は、「二」で駐在所を襲撃した二頭の虎の話面白おかしく書き記している。作品の中で「私」は、この出来事を「京城日報」で読んだと語っているが、ここには、「まだ巡査の威張れる時代だった」頃（警察官が大幅に増員される以前のことだろうか）の巡査の滑稽な姿をからかうように語る「私」がいる。と同時に、ここで取り上げられていている「京城日報」のもともなったのは、これも高崎宗司によると、一八九五年、日本の公使館の機密費から費用が出されて発行された「漢城日報」であり、それは「宮廷融和」のための「もつとも効果的な策」だと捉える井上馨の資金提供によって発刊された新聞でもあった。「私」が読んでいた当時の「京城日報」は、朝鮮総督府の機関誌として発行されていた新聞であり、おそらく、内地から転校してきた当時の「私」は、意識することなく、朝鮮を支配統治する

側に立つて「半島人」を見ていたはずである。「二」で「私」と趙大煥が出会ったのはそんな時代のことだったのだ。

だとすれば、日本の統治に協力的な両班の子弟として日本人が通う龍山小学校、京城中学に入学を許されていた趙大煥に、いきなり泣きながら跳びかかってきた日本人子弟の「私」を組み伏せることができたはずはない。趙は「私」に組み敷かれて胸ぐらを小突き回されて無抵抗でニヤニヤしている。そんな趙を、「私」は、「案外弱いのだ」と受け止めたのだが、そこには「私」には捉えられない趙大煥の思いがあつたに違いない。

「私」の趙に対する見方の変化は、この事件から二三日経って趙が私に自分の名前を名乗る部分に描かれている。趙が私に自分の名前を趙大煥だと告げたとき、どう見ても「半島人」に見えないために何度も聞き返したことを、「私」は苦に病んでいる。

「私」はその後も趙に「半島人」という意識を持たせないように気を遣うのだが、趙自身はそのことを一向に気にしていないらしいと、当時の「私」は捉えていた。しかし、「もつとずっと後になってから」、「自らその事にこだわっているからこそ、逆に態度の上では、少しもそれに拘泥していない様子を見せ、ことさらに自分の名を名乗ったりしたのだ」ということに「私」は気付くのだ。

また、「五」で、趙が発火演習の夜に先輩達に殴られたエ

ピソードを語る「私」の、趙に対する見方からも読み取れることがある。「此の時ばかりでなく、趙は前々から上級生に睨にらまれてゐた」と語る「私」は、その理由を「近眼であるにも拘らず眼鏡を掛けてゐないという事実」や「上級生達の思ひ上がった行為に対して時として憫笑を漏らしかねない」ところや、さらには「荷風の小説を耽読する」ぐらいで、「軟派に過ぎてもゐた」からだと捉えている。しかし、趙大煥が日本人の上級生達にこういう態度を取ったのには彼自身が抱えていた思い、「私」には伝えられない、日本および日本人に対する心の奥深くに抱えた強い思いがあつたからではないか。

「私」や趙大煥が発火演習に出掛けたこの年、それを一九二四年と推定してもいいだろうが、この年は、関東大震災の翌年で、大震災の直後に朝鮮人に対する誹謗中傷が広まり、日本にいた多くの朝鮮人達が虐殺された日本での出来事が、既に朝鮮にも伝わっており、趙大煥自身もそのことを耳にしていたのではないかと推測できる。その根拠となる記述が、昭和四年に、作者中島敦が第一高等学校校友会発行の『校友会雑誌』に発表した習作の「巡查の居る風景」の中にある。作品の中で、「淫売婦」の金東蓮が日本に行っていた夫が関東大震災の後の朝鮮人虐殺に捲き込まれて殺されたことを、彼女の客の職人らしい男から告げられるというエピソードが描かれている。この記述からも、関東大震災後の朝鮮人虐殺

という出来事は、既に朝鮮本土にも伝わっていたことを既成の事実として中島敦が受け止めていたことが分る。日本で起こったこの出来事を耳にしていたに違いない趙大煥は、自分を力で押さえつけようとする日本人の上級生に対して素直に謝ることができなかったのだ。

中学三年生の発火演習の後まもなく、趙大煥は、「私」の前から姿を消してしまふ。趙の行動からは、彼が、自分たちの国土を統治支配する日本人に対して強い憤りを感じていたことが読み取れるし、小学校以来の友人である「私」にさえその思いを告げることもできない苦しみを抱えていたことも読み取れるのではないだろうか。

六 趙大煥と「私」の現在が描かれる「七」について
小説最後の「七」の冒頭は、次のような語り手の言葉で始まっている。

さて、これでやつと虎狩の話を終ったわけだ。で、此の虎狩から二年程経つて、例の発火演習の夜から間もなく、彼が私達友人の間から黙つて姿を消して了つたのは、前に言つたとほりだ。さうして、それからここに十五年、まるで彼とは逢はないのだ。いや、さう云ふと嘘になる。実は私は彼に逢つたのだ。しかも、それがつい此の間のことだ。だからこそ、私もこんな話を始める氣になつたのだが、併

し、その逢ひ方といふのが頗る奇妙なもので、果して、逢つたといへるか、どうか。その次第といふのはかうだ。

このように、「七」では、三日前の趙大煥とおぼしき男との偶然的遭遇が語り始められるが、その前に「私」は、読者に、もう一度、「五」の発火演習の後、趙大煥が失踪したことを思い起こさせてから、三日前の趙との再会を語り始めるのだ。趙の失踪からは既に十五年、六年が経過し、その間に、「まるで彼とは逢はないのだ」と語つてすぐ、「実は私は彼に逢つたのだ」と語り直し、「だからこそ、私はこんな話を始める氣になつたのだが」と続ける。ここからは、彼との再会のエピソードの中に、「虎狩」という小説を読み解く鍵が隠されていることが読者には読み取れるのではないか。

「私」は、「その次第といふのはかうだ」と語り、三日前に偶然本郷通りで声をかけられた男が「旧知の一人であることは確か」だが、「それが誰であつたのかが疑問として残つた」と、その出会いを具体的に語り始める。

この男は、「私」に「煙草を一本くれ」と言い出す。「バツト」の箱をそのまま渡した「私」に対して、彼は煙草を箱のまま返そうとして、隣寸と言おうとしたのに煙草と言つてしまったと、その言い間違えについての説明をし始める。しかし、「私」はここで彼の説明する言葉には全く耳を傾けずに、ただこの男が誰であつたかを懸命に思い出そうとしているの

だ。「私」は、この男の「セカ／＼した早口なしやべり方」を耳にしなが、それが記憶の中の誰のしゃべり方であつたかを懸命に思い出そうとしている。二人が本郷三丁目の停留所の前の薬局で新発売の性器具の見本らしいものを見ているとき、この男の「ニヤ／＼した薄笑ひ」を見て、初めてそれが趙大煥だと気付くのだ。そこで「私」が挙げている趙大煥の特徴は、「皮肉げ」な「薄笑ひ」であり、「お人良しと猜疑とのまざりあつた其の眼付」である。その眼付が、「虎に殺され損つた勢子を足で蹴返していま／＼しげに見下した」時の眼付と重なつたとき、それが趙大煥のあの眼付であることに気付くのだ。この瞬間が、この小説の折り返し地点なのだ。「私」は、この眼付を見て、少年時代に趙と一緒に رفتた虎狩の時に見た彼の眼付を思い出し、その時の趙の振る舞いこそ趙大煥が心の奥深くに抱えていた思いが行為となつて現れたものだつたのだ気づき、その趙大煥を中心にして、自分の記憶の中にある趙との思い出のエピソードを、改めて思い起こして、日本統治下での趙大煥という「半島人」の友人との交流を再構成することで、二人の関係を捉え直そうとしたのではないか。

では、「私」は、趙大煥のこの時の思いをどう受け止めたのだろうか。「私」が、虎狩の際に、「氣を失つて倒れている」勢子を「足で荒々しく其の身体を蹴返」す趙の姿を目の当たりにして、強い衝撃を受けたことは先にも触れたが、この趙

の振る舞いに、「此の地の豪族の血」を見、「終わりを全うしない相」を見たのだが、それから十数年を経た「今」、うらぶれた姿で目の前に立つ男が、趙大煥だと確信して、小学校五年生で出会つてから中学三年生で「私」の前から姿を消すまでの思い出の中の趙と重ね合わせたとき、勢子を蹴り倒す趙が心の奥に抱えていたのは、激しい怒りや悲しみだつたことに気付いたのではないか。目の前の虎に怯えて氣を失つた勢子の姿を見た少年の趙大煥は、その虎に、自分たちを押さえつけて統治している日本人の姿を重ね、何の抵抗もできず、ただ従順に従い、怯えて氣絶してしまつた勢子に、自分をも含む「半島人」のふがいなさを見たのではないか。そして、心の内に押さえ込んでいた憤りやいらだちが爆発したのではないだろうか。それは、「五」で、趙が二度繰り返している、「強いとか、弱いとかつてどういふことなんだろう」という言葉とも重なつて、「私」との最初の出会いで、無抵抗に「私」に小突き回されていたときから、発火演習で上級生達に殴られるままになつていたときまで、変わることなく趙大煥が抱き続けていた思いだつたのだと、この時初めて「私」は氣がつくのだ。「五」の後半に「私」と會話を交わす次のような場面がある。

——俺はね、(と、そこで一度彼は子供のやうに泣きじやくつて)俺はね、あんな奴等に殴られたつて、殴られるこ

となんか負けたとは思ひやしないんだよ。ほんたうに。それなのに、やつぱり（ここでもう一度すすり上げて）やつぱり俺はくやしいんだ。それで、くやしいくせに向つて行けないんだ。怖くつて向つて行けないんだ。――

「趙の話を聴いていた私」は、「あんな奴ら」というのを、趙に暴行した上級生達だと捉えたのだが、趙が指してしているのは、直接彼を殴った上級生達だけではなく、彼が、「くやしいくせに向かつて行けない」「怖くつて向かつて行けない」相手というのを、もつと広く捉えているのではないか。植民者として国土に踏み込んできて、自分たちを押さえつけようとしている統治者としての日本人達すべてを指していたのではないか、と語り手の「私」は、「今」この言葉を書き付けながら気付いたのではないか。ところが、上級生に殴られた後で趙の話を聞いている時の「私」は、「全く小学校の庭で私と取組み合つた時以来、彼は弱虫だつた」と受け止めてしまつていたのだ。ここには、趙と「私」のあいだの決定的で越えることのできない深い溝があつたのだ。そうでありながら、当時の「私」も、次のような歯切れの悪い思いをも抱いたのも確かなのだ。

その時、ひよいと彼の先刻言つた言葉を思ひ出し、その隠れた意味を発見したやうに思つて、愕然とした。「強いと

か弱いとかつて、一体どういふことだらうなあ」といふ趙の言葉は――と、その時私はハツと気が付いたやうに思つた――たゞ現在の彼一個の場合についての感慨ばかりではないのではなからうか、と其の時、私はさう思つたのだ。勿論、今から考へて見ると、これは私の思ひすごしであつたかも知れない。

「強いとか、弱いとかつて、どういふことなんだらう」という趙のつぶやきは、先輩達の暴力を軽蔑し、それに負けたとも思つていないのに怖くて向かつていけない自身のふがいなさ、「弱さ」の吐露だと受け取つていたはずの「私」が、そこにあるのが、「現在の彼一個の場合についての感慨ばかりではないのではないか」とふと気付くのだ。つまり、植民者である日本人に対して「くやしいくせに向かつて行けない」という、日本人が中心の中学校で学んでいる朝鮮のエリート階級、両班の子弟達の思い、さらに、多くの朝鮮の同胞の思いが重ねられているのではないかということに心のどこかで気付いたのだ。しかし、そう語りながら、語り手の「私」は、すぐに韜晦し、「これは私の思ひすごしであつたかも知れない」と、自らの立ち位置（統治者である日本人の子弟として過ごしていた少年時代）に返り、その思いを否定する。だが、歯切れの悪い語りはその後も続き、さらに、次のように語る。

が、常々自分の生れのことなどを気にしないやうに見せながら、実は非常に気にしてゐた趙のことではあり、又、上級生に苛められる理由の一部をもその点に自ら帰してゐたらしい彼を、よく知つてゐた私であつたから、私がその時そんな風に考へたのも、あながち無理ではなかつたのだ。

ここでいう「そんな風に考へた」とは、「彼一個の場合についての感慨ではない」と考えたということだ。つまり、彼が日本人ではなく、「半島人」であることを気にしていたことを取り上げ、そのことが上級生達に苛められる理由の一部だと趙が捉えていたことを述べた上で、「私」が、「現在の彼一個の場合についての感慨ばかりではない」というのは、それが趙大煥だけでなく、日本統治下の多くの朝鮮人同胞たちに通ずる思いであることを読者に提示した上で、それを「見せ消ち」のようにして否定するという表現技法を用いているのである。否定しているのは、当時の日本による朝鮮統治のあり方に批判的な語り手だと捉えられるのを懸念したからだろうか。語り手は、こういう「私」の「感慨」を、「あながち無理ではなかつたのだ」と付け加えて、その可能性をわずかに残しながらも、趙の思いにそれ以上踏み込むことなく、当時の「私」の思いが別の方に向いていくのを追う。「裸の、弱虫の、そして内地人ではない、半島人の、彼を見せてくれたことが、私に満足を与へたのだつた」と。ここに描き出さ

れているのは、当時の「私」の、自分とは相容れるところのない「他者」である趙に対する同情と哀れみである。そして、おそらく、この「私」の思いが、この後の趙の失踪とも密接な関係があつたのだ。ここでの「私」の自問自答は、過去の出来事を語りながら、今、大人になつた「私」が、もう一度この時のことを思い起こして、彼の失踪の理由を、発火演習の時の彼の言葉を思い起こすことで突き止めようとしているのだと考えるべきであろう。

失踪の原因を探る手がかりは、あの露営の晩に趙大煥が二度繰り返した「強いとか、弱いとかつてどういふことなんだろう」という言葉にある。その言葉が、趙自身の対他関係、自分を苛める統治者である日本人子弟の上級生達に対する自分自身の態度、「負けたとは思ひやしない」のに「くやし」くて「怖くつて向つて行けない」という、自分だけでなく、多くの朝鮮人達が抱える、植民者日本人に対する卑屈な態度が彼自身のものでもあることに気付き、その卑屈な態度を捨てて日本の朝鮮支配に抵抗する運動に加わる決意をしたことが失踪につながつたのではないかと、「今」の「私」は判断したのだ。しかし、語り手の「私」は、それをはつきりと語ることができないために、曖昧で歯切れの悪い表現をするこ

とで、その解釈を読者に委ねたのではない。そう考えると、失踪後の趙大煥に関する二つの噂のいずれもが「あり得ること」だと「私」が受け止めているのも理解

できる。「ある種の運動の一味に加はつた」とは、反日（抗日）運動のことで、趙が赴いたのは、「反日朝鮮民族運動の拠点であつた上海^{上海}」であり、上海での運動が弱体化する中で、彼が「身を持ち崩し」たのだという事実を示唆しているのではないか。そのことは、「七」で、「私」が出会つたときの趙大煥の身なりや顔立ちからも容易に想像できる。

では、「七」の趙の言葉から「私」は、どのような趙の思ひを受け取つたのか、

この「旧知の一人」と思われる男が、自分が「燐寸」を求めていたのに、それを「煙草」といつてしまつた誤りについて説明した内容を、「私」は、それを趙大煥の言葉として、振り返りながら次のように語り直している。

彼が私からバットを受取つて、さて、燐寸を取出すために右手をポケットに入れた時、彼はそこに矢張り同じ煙草の箱を探りあてたのだといふ。その時に、彼はハツとして、自分の求めてゐたものが煙草でなくて燐寸であつたことに気がついた。そこで彼は、自分が何故、この馬鹿々々しい間違ひをしたかを考へて見た。単なる思ひ違ひと云つてしまへば、それまでだが、それならば、其の思ひ違ひは何処から来たか。それを色々考えた末、彼はかう結論したのだ。つまり、それは、彼の記憶が悉く言葉によつたためであると。（中略）感覚とか感情ならば、うすれる

ことはあつても混同することはないのでが、言葉や文字の記憶は正確なかりに、どうかすると、とんでもない別の物に化けてゐることがある。彼の記憶の中の「燐寸」といふ言葉、もしくは文字は、何時の間にかそれと関係のある「煙草」といふ言葉、もしくは文字に置換へられて了つてゐたのだ。……彼はさう説明した。それが、此の発見がいかに面白くて堪らないといふやうな話ぶりで、おまけに最後に、かういふ習慣はすべて概念ばかりで物を考へるやうになつてゐる知識人の通弊だ、といふ思ひ掛けない結論まで添へた。（傍線は、引用者による）

少し長い引用になつたが、ここから分かることは、この言葉が、趙大煥の直接語つた言葉ではなく、「私」が、趙の言葉を思い起こしながら、「私」の視点から語り直した言葉だということである。実際、この時、誰かは分らないまま、この男が話すのを聞いて、「私」は、「彼自身は非常に興味を感じてゐるらしい此の問題の説明に、あまり耳を傾けてはゐなかつた」とわざわざ断つてゐるし、この時は、それが「誰であつたかを思い出さうと」することだけを考へていたのだから。彼が趙大煥だと気付いてから、「私」は、彼の説明をも一度思い起こし、この言い間違えの説明を通じて趙が「私」に何を伝えたかつたのかを改めて考へたのではないだろうか。ここで重要なのは、「今」の「私」が、この言葉の意味

するものを、少年時代の自分と趙大煥との関係に置き直し、自分の記憶の中にある趙大煥という友人との関係を、その時の「感覚と感情」を思い起こして、もう一度捉え直そうとしたことである。さらに、そのきっかけを、この時の趙の説明の言葉が与えてくれたことである。

おわりに

語り手の「私」によって捉え返された趙大煥は、小学校で親しくなり、その後、中学三年生で彼が失踪するまですつと親しく付き合い続けた友人であり、二人は、似た資質と共通する関心の対象を持ち続けていたはずだと「私」は思っていたのだが、趙自身は、「私」には決して理解し得ない思いを抱えて、シニカルな姿勢で日本人中心の小学校、中学校に通っていたのであり、発火演習での先輩達による暴行を機に、「私」との関係も断ち切って「私」の前から姿を消してしまつたのだ。その趙が抱えていた思いを、少年時代には、「半島人」であることに特別な同情をしてほしくないという気持ちだと捉えていた「私」が、いかに趙大煥という男を理解できていなかったかということに、十五六年後の、偶然の再会をきっかけとして気付いた「私」が、改めて記憶の中のエピソードを、当時の「感情と感覚」をもとに思い起こして、再構成しようとしたのがこの小説なのである。その際、現在の「私」も、朝鮮を統治する植民者の日本人としてのゆがみと

偏見を持った見方の中にある男として記しているのには、作者、中島敦なりの策略があるのではないか。先にも記したように、太平洋戦争の戦時下で、日本の朝鮮支配に批判的な視点から書かれた作品だと受け取られることを懸念し、語り手を、朝鮮での植民者である日本人の子弟であることに無自覚で、限られた視野の中でしかものを見ることができなかった、「中山君」という虚構の「主人公・語り手」として設定することで、「私」の語り得ない趙大煥の思いを、読者に読み取らせようとして構成したのが、この「虎狩」という小説の「語りの仕組み」なのだとは考えている。

注

- 1 郡司勝義「解題 虎狩」(『中島敦全集 第一巻』筑摩書房 一九七六年三月刊)
- 2 木村一信「出発期の問題——『虎狩』の位相」(『中島敦論』双文社出版 一九八六年二月刊)
- 3 山下真史「第一章『虎狩』論」(『中島敦とその時代』双文社出版 二〇〇九十一月刊)
- 4 藤村猛「中島敦『虎狩』論」(『安田女子大学国語国文学論集 33』二〇〇三刊)
- 5 楠井清文「中島敦『虎狩』論——語り手の手法と『虎』のイメージの分析を中心に——」(『論究日本文学 90』立命館大学日本文学会 二〇〇九年五月刊)

6 ボヴァ・エリオ「第二章〈物〉と〈名〉の二分法——「虎狩」という分水嶺」(『中島敦文学論植民地と他性』人文書院二〇二三年七月刊)

7 『中島敦全集1』筑摩書房二〇〇一年一〇月刊の「解題 虎狩」の中で、川村湊はこの「半島人」という言葉について次のように述べている。

「原稿との異同は、ひら仮名表記と漢字表記の違い、および原稿で消去されたり、書き換えられたもの、また挿入が多く、その中でも原稿では「朝鮮人」「日本人」がすべて「半島人」「内地人」に直されているのは興味深い。

「内鮮一体」が鼓吹され、朝鮮人に「皇国神民の誓詞」を暗唱させるような朝鮮総督府による同化政策、皇国民化政策が強まるなか、初稿の「朝鮮人」「日本人」は「半島人」「内地人」に置き換えなければ、発表が不可能になると考えられたのだろう。」

8 両班(やんばん) 朝鮮、高麗、李氏朝鮮時代の特権的な文武官僚階級。

9 鷺只雄「虎狩」——その享楽主義デイルフタンニイズム (『中島敦論「狼疾」の方法』有精社一九九〇年五月刊)

10 南富鎮「第2章第2節「虎狩」と〈虎〉の死」(『昭和文学の朝鮮体験』筑波大学文藝言語研究科 博士論文 一九九八年度)

11 楠井清文 注5と同じ

12 『中島敦全集2』(二〇〇一年一二月刊)の「未定稿」に「北方行」や「プールの傍で」とともに収録。「解題」には、「タイトルの『無題』は原稿用紙第一枚目冒頭欄外に、明らかに後の手と分かる字で書かれている」とある。

13 高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』(岩波新書 二〇〇二年六月刊)

14 高崎宗司 注13と同じ

15 小谷注之『中島敦の朝鮮と南洋』(岩波書店 二〇一九年一月刊)

付記1 『虎狩』本文は、『中島敦全集1』(筑摩書房 二〇〇一年刊)によったが、旧字体で書かれているものは、原則として新字体に改めた。また、引用文の傍線は角谷による。

付記2 本文中では触れなかったが、以下の論文からそれぞれに大きな示唆を得た。

・佐藤和也「中島敦「虎狩」論——植民地体制下における概念への懷疑——」

・尹東燦「中島敦『虎狩』論」

・宮田一生「中島敦『虎狩』論」

・清水智子「中島敦「虎狩」における植民地の描き方——日本人である語り手「私」に着目して——」

・諸坂成利「『換喻』としての「虎狩」」

近現代の短編小説を読む

—— 第一回 志賀直哉「焚火」^{たきび}を読む

角 谷 有 一

はじめに

近現代の作家達の短編小説一作品を取り上げて、その作品を読み、できるだけ分かりやすく、小説の読み方を探るといふ、小説の読み方入門のような文章を書いてみたいと思っていました。

これまで比較的よく読まれてきた短編小説の中から、今、あらためて読み返してみたい小説作品を毎回一作品を選んで、近代小説を読み慣れていない人たちにも作品に対する興味を持つてもらえるような、作品案内でもあり、その読み方のヒントも得られるような文章を書いてみようと思いました。そこで、目の前に、中学生や高校生の読者がいて、その

読者に語りかけているつもりで書いてみようと思いました。

第一回は、芥川龍之介も絶賛し、自分には「最も及びがたい」と評価した、志賀直哉の代表的な「心境小説」といわれる「焚火」^{たきび}を取り上げて、この作品がどのように読めるかを探ってみましょう。

まず、「焚火」いう小説について簡単に紹介しておきます。

志賀直哉が、小説家として一カ所に腰を据えて住んで創作活動に取り組み、数々の傑作を書き上げたのは、大正四（一九一五）年、千葉県の子孫に移り住んだ時からです、そして、我孫子に移った二年後には、「城の崎にて」や「赤西蠣太」、「和解」などを発表しています。その後、大正二一年に、京都に移り住むまでの八年の間に、「小僧の神様」、「真鶴」などの短編小説の傑作を発表し、大正一〇年からは、一年間かけて「暗夜行路」前篇も完成させています。志賀直哉の最も充実しているこの時期に書かれたのが、「焚火」です。今も、志賀直哉の「心境小説」を代表する作品として読み継がれている「焚火」という小説について、最初に、その成立の事情と評価、作品構成とあらすじについて簡単に説明しておきます。

一 作品の成立事情と当時の評価について

「焚火」は、大正九年四月に、「山の生活にて」という題

名で雑誌『改造』に発表されました。志賀直哉は、大正三年

の一〇月に「寓居」という作品を発表して以降三年半にわたって創作活動を休止します。そして、同じ大正三年一二月に、父の反対を押し切って、武者小路実篤の従姉妹であり、夫を亡くし一人の子を持つ母でもあった勘解由小路康子と結婚します。しかし、直哉と父直温との不和を苦にして神経衰弱になった康子を気遣い、京都から鎌倉へ、そして、群馬県の赤城山へと移り住みます。この赤城山で仲良くなった宿の主人やそこに滞在していた画家との交流の中で経験したことをもとにして書かれたのが「焚火」という作品です。この作品は、志賀直哉が経験した出来事を赤城山の美しい自然描写の中に描き上げた紀行文か随筆のような小説ですが、緊密な構成と簡潔な文章によって、後に、「心境小説」の傑作として高い評価を受けるようになります。

この作品について、志賀直哉は昭和三年に雑誌『改造』に掲載された「創作余談」の中で次のように述べています。

前半は赤城山^{あかぎさん}で書き、後半は四、五年して我孫子で書いた。書いた時には如何^{いか}にも書き足りない気がして止めてしまった。しかし四、五年して読むと案外書けているように思われ、後半をつけ、雑誌に出した。そして今では自分でも好きなものの一つになっているが、(略)

(高橋英夫編『志賀直哉随筆集』岩波文庫 一九九五年

一〇月刊より)

この作品は、作者の志賀直哉自身も愛着を持っていた作品ですが、その後、さらに高い評価を受けるようになりました。発表直後の大正九年四月五日の読売新聞では、作家の上司小剣が、「山の上の湖水の畔の仮りの生活とでもいふべきものが、美しく描かれてゐる。水の色や焚火の光、人の静かな話し声までが、一つ一つ手に取やうに現はれてゐる」と評しています。

そんな中で、谷崎潤一郎の批判に答える形で書かれた「文芸的な、余りに文芸的な」という文章の中で、芥川龍之介は、志賀直哉の「焚火」に触れて、次のように書いています。

志賀直哉氏は描写の上には空想を頼まないリアリストである。その又リアリズムの細に入っていることは少しも前人の後に落ちない。若しこの一点を論ずるとすれば、僕は何の誇張もなしにトルストイよりも細かいと言ひ得るであらう。(中略)

しかし描写上のリアリズムは必ずしも志賀直哉氏に限ったことではない。同氏はこのリアリズムに東洋的伝統の上に立った詩的精神を流しこんでいる。同氏のエピソードの及ばないのはこの一点にあると言つても差し支えない。これこそ又僕等に、——少なくとも僕に最も及び難い特色

である。僕は志賀直哉氏自身もこの一点を意識しているかどうか、は必ずしもはっきりとは保証出来ない。(略)しかしこの一点はたとい作家自身は意識しないにもせよ、確かに同氏の作品に独特の色彩を与えるものである。「焚火」「真鶴」等の作品は殆どこう云う特色の上に全生命を託したものであろう。それ等の作品は詩歌に劣らず(略)頗る詩歌的に出来上がっている。

(芥川龍之介、谷崎潤一郎『文芸的な、余りに文芸的な』饒舌録ほか)講談社文芸文庫 二〇一七年九月刊より

芥川龍之介の、「焚火」を含む志賀直哉の小説に対する評価が、その後の「焚火」の高い評価に繋がっているのは確かだと思われます。

では、「焚火」は、どのような小説なのか。その内容と構成について簡単に説明しておきましょう。

二 あらすじと作品構成について

「焚火」は次のような文章から始まります。

その日は朝から雨だった。午からずつと二階の自分の部屋で妻と一緒に、画家のSさん、宿の主のKさん達とトランプをして遊んでいた。部屋の中には煙草の煙が籠って、皆も少し疲れてきた。トランプにも厭きたし、菓子も食い

過ぎた。三時頃だ。

登場人物は、「自分」という語り手とその妻、そして、画家のSさんと宿の主のKさんです。舞台となっているのは赤城山で、Kさんは、これから「自分」と妻が住むことになる山小屋を建ててくれているところです。

この後のあらすじを追ってみましょう。三時頃になり、雨も上がったようなので、Kさんは建てかけの山小屋を見に出かけ、Sさんも絵を描きに森の方へ出て行きます。「自分」も妻に誘われて、Kさんが作っている小屋を見に出かけます。

そこで森から戻ってきたSさんも一緒にになり、雨上がりの山の夕暮れを眺めながら、前日も夕暮れ時に四人で木登りをして遊んだことを思い起こします。「自分」は前日の楽しみを想いながら、「晩、舟に乗りませんか」と皆を誘います。

夕食を終えた後、湖の岸辺にとめてあつた小舟に四人は乗り、舟を漕ぎ出します。静かな晩、夕映えの名残がわずかに残っています。そんな中で、「焚火をしますわ」と妻が言います。Kさんが「蔵取りが野宿をしているのかも知れませんが」と言うので、その岸に上がると、炭焼窯のところで人が寝ています。その前で四人は少し話をして、また舟に乗ります。Kさんが「こつちでも焚火をしましょうかね」と言います。そして舟をこいで岸につけ、薪と白樺の皮を拾い集めて焚火をはじめます。焚火を囲んでいろいろな話をしている

うちに、Kさんが山で雪に振り込められて困ったときに不思議な経験をした話をします。

それは、去年の冬、雪が二、三尺も積もった頃のことです、姉の病気が悪いので山を下りたKさんが、三晩泊まって戻ってきた日、日暮れ近くになったけれど、まだ元気で歩けそうだったので、山の下に泊まらずに山に登りはじめます。しかし、登るに従って雪は深くなり、どこが路かもわからなくなり、なかなか登れません。なんとか二時間余りかかって峠までたどり着きます。路が下りになったときには、夜中の一時半を過ぎていました。その時、遠くに二つの提灯が見えました。それは、Kさんを迎えに来た義理の兄と氷切り人夫の三人とだったというのです。義理の兄は「今、お母さんに起こされて迎いに来たんですよ」と言うのです。Kさんは母に帰る日を伝えていなかったのに、母は全く迷いもなく、「Kが帰って来るから迎えに行つて下さい」と言つて義理の兄を起こしたというのです。Kさんの身に起きた不思議な話を聞き終えたとき、梟の鳴き声が聞こえます。Kさんの話に涙ぐんだ妻が、「もう帰りましょうか」と言い、燃え残りの薪を湖水の中に投げ捨てて、舟に乗り、帰るところでこの小説は幕を閉じます。

小説は、赤城山での或る日の出来事を描き、その中に、Kさんが語るのを皆が聞くという、Kさんが去年経験した不思議な出来事の話がはめ込まれている、いわゆる、「入れ子構造」

の物語になっています。しかし、そこに書かれたお話だけを讀むと、旅先で、ある一日に経験した出来事を時系列に従つて書き記したエッセイか紀行文のようでもあり、また、美しい自然を描いていく中で、Kさんの経験した不思議な出来事を話すのを皆で聞くだけの物語にも見えますが、小説の構造や細部に施された様々な仕掛けを見ていくことで、それまで捉えられなかった作品の隠された意味が見えてきます。

三 作品の構成から読み取れること

ここでは、この作品についての先行研究については、いちいちに触れることはしませんが、小林幸夫氏をはじめ岡友加氏や島村輝氏の論考を参考にしたところがあることは、最初に述べておきます。

ところで、この作品成立の背景には、志賀直哉自身の体験をモデルにしたところがあり、また、小説の中の妻の涙も、モデルである志賀の妻の康子の境遇と関わりがあるといわれています。また、志賀直哉自身の母との関係や、妻の、母としての子に対する思いが投影されているのも確かですが、今回、作品を読むに当たっては、作者志賀直哉の実生活とは切り離して読んでいきます。

最初に、小説の中の時間について触れておきます。「その日」と書かれた新緑の季節の或る日が物語の始まりの時です、雨が降る中、煙草の煙が立ち上る部屋で、四人でトランプをし

て遊んでいたのに厭きて、雨の上がった外へKさんとSさんが出て行く午後の三時頃から夜の十一時に焚火を消して舟で戻るまでの半日の出来事が、時系列に沿って語られています。その中に、前日の思い出とKさんの語る去年の冬の冬の不思議な出来事を聞く場面が、「自分」の視点から語り直されているのです。

小説の舞台となっているのは、赤城山の宿と近くの大沼という湖ですが、この地域については、島村輝氏が、その著書の『志賀直哉の短編小説を読み直す』（かもがわ出版 刊）の中で面白いことを書いています。赤城山という山があるわけではなく、この地域全体が赤城山と呼ばれて、赤城神社の神域だということです。そして、この神社の祭神は天之水あめのみづのり分神と国之水くにのみづのり分神という安産の神であり、女性または母親を守護するという御利益と子供に關わる御利益があることから、物語の冒頭から母と子を守る領域で展開される物語であることが暗示されているということです。ここで、「自分」とその妻、宿の主人のKさんと画家のSさんが遊ぶ空間というのは、女性と子供が守られる神域（神の加護のある場所）なのです。何でも無い描写の中に何度か子供が現れるのも、そのことと関係があると思われます。夕食の場面でも、さりげなく、Kさんが赤ん坊にのませるミルクを溶いているところが書かれています。こういう点に気付いて読み返してみると、四人が食事の後、いよいよ小舟に乘りに森へ行くところでは、こう

書かれていることに気づきます。「四人は大きな樅の木に被われた神社の暗い境内を抜けていく」と。四人は神域もみの中からさらに赤城神社の境内を抜けて湖に出て行くのです。そして、そこには幻想的な不思議な光景が広がります。「樅の太い幹と幹の間に湖水の面が銀色に光って見えた」という、さなる神域に入っていく感じを受けますね。

次に指摘しておきたいのは、小説の「語り手」である、「自分」の視点と、その語り方についてです。

四 「語り」と視点について

冒頭の数行を見てみましょう。ここでの視点人物は「自分」ですが、「自分」が主語になっているわけではありません。「皆みんなも少し疲つかれてきた」「皆は生き返ったように互たがいに顔を見交みかわした」というように、四人の思いを一つにして語られています。この点については、これまでも多くの研究者が指摘していることですが、この小説では、「自分」をはじめ、作中の四人の人物の気持ちや感情が、互いに同調し、同じ思いを共有しながら、その主語が、「皆」というように表現されているのです。もちろん、文章全体はあくまでも一人称で、「自分」の視点に立って「自分」によって見られた世界が描き出されているのですが、それは、「自分」一人ではなく、他の三人と気分や感情を共有したものとして描き出されているのです。だからこそ、Kさんの不思議な体験の話にも誰も疑問

を抱かずに、「皆」が自然に受け入れるのであり、それが読者にも伝わるのだと思います。

では、ここに描かれている出来事はどのようにして「皆」に共有されていくのでしょうか。冒頭から展開を追ってみていきましょう。

五 物語を動かす妻の言葉

最初に「自分」が動き始めるのは、雨が上がって、「新緑の香を含んだ気持ちのいい山の冷々とした空気」が流れ込んできて、KさんとSさんが出て行った後、横になって本を読んでいた「自分」に「小屋にいらつしやらない？」と声をかける妻の誘いによつてです。そして、妻の言葉に促されるように、「自分」は、外に出て行き、Kさんが作りかけている小屋を見て、妻と少し手伝っているうちにSさんも戻ってきて、四人は、また、同じ気分を共有しはじめるのです。四人は、山の上の夕暮れを気持ちよく眺めます。この時の思いはこう書かれています。「皆快活な気分になった」と。「自分」は、前日の美しい夕暮れを思い出しながら、四人で木登りをして遊んだことを思い浮かべるのです。書かれてはいませんが、他の三人も同じ思いの中にいるのでしょうか。だからこそ、珍しく「自分は」という主語とともに「晩、舟に乗りませんか」と誘った言葉に、皆は、自然に同調するのです。

食事の後、赤城神社の境内を抜けて湖に舟を浮かべて出か

けるところからは、妻の言葉が、皆を動かしはじめます。辺りには、昼間の美しさとは違う夜の自然の神秘的な風景が広がってきます。妻は言います。「焚火をしていますわ」と。それに答えるようにKさんは舟の方向を変えてその焚火の方に近づいていくのです。すると、また、妻が、「ちよつと上がってみたいわ」と言つて、四人は、「蔵取り」が焚火をしながらか炭焼き窯の中で寝ている岸に上がります。「蔵取り」は起きていたので、火事の心配がないことを確認した後も、「行きましようか」と行動を促すのは妻なのです。その後、目指す場所に上がつて焚火を始めてからも、尺取り虫を怖がるKさんとSさんの会話を聞きながら、「山には別に可いものつて、居ませんか？」と、話題を怖いものに向けるのも妻であり、そこで山犬や大入道の話題が出された後「不思議なんて大概そんなものだね」というSさんの言葉に対して、「でも不思議はやつぱりあるように思いますわ」という言葉を妻が発するところから、Kさんの雪山での体験の話が引き出されることになるのです。このKさんの雪山での体験の話がこの小説の中で持つ意味については、この後に触れますが、Kさんの話が終わり、梟が鳴くのを聞き「十一時過ぎましたよ」という言葉に、「もう帰りましようか」と皆を促すのも妻なのです。

この晩の、女性の守護神でもある赤城神社の神域で、湖に舟をこぎ出して、皆で焚き火を囲みながら、思いを一つにし

た遊びの中で、皆を促して皆の行動を先へ先へと進めていったのは、四人の中でたった一人の女性である「妻」であること、女性の力がKさんの不思議な話を引き出したことは、ここで確認しておきたいと思います。

六 Kさんの話が小説の中で持つ意味について

さて、最後にKさんの話が、この小説全体の中でどんな意味を持っているのか、四人の「その日」の遊びとどう関わるのかという点について考えてみましょう。

ここまで見てきたように、赤城山という場所は、母であり、母となる女性が守られる神域であり、そこで、語り手の「自分」の妻である女性の言葉に先導されるように、この日、皆は動いてきて、焚火を囲んで話をしていく中で、妻が、「でも不思議はやっぱりあるように思いますわ」と言つて、「夢のお告げ」を言い出したときに、SさんがKさんから聞いた雪の中で困った話を持ち出して、その話を皆で聞くことになります。ここからKさんの話が始まるのです。Kさんの話も、女性であるKさんの母親が主導して息子を危機から救い出す話ですが、そこで発揮されるのは、女性の力だけではありません。山の自然の、昼の美しさとは一変した、山の夜の自然な不気味さが、Kさんの体験した不思議を皆に信じさせ、それを記述する「自分」の言葉が、読者にもそう思わせるのです。そのことについて示唆的なことを述べているのが、下岡

友加氏ですが（「人間・自然・宇宙の連環——志賀直哉「焚火」の表現世界」『県立広島大学人間文化学部国際文化学科紀要』二〇一一）、下岡先生の指摘する、夜の自然の不思議な現象にも少し触れながら、Kさんの話を見ていきましょう。

Kさんの話の前に、夜の自然の不思議さ、物と物との距離や人と物との距離が昼間とは変化することが、ここまでに幾つか書かれています。たとえば、舟をこぎ出して最初に見つけた「蔵取り」が野宿している場所の焚火は、「静かな水に映って二つに見え」るし、「晴れた星の多い空を船べりからそのまま下に見ることが出来た」というのは、星が舟のすぐ下に映って見えるという、夜の自然が見せる不思議な距離感です。それを証拠づけるように、舟をこぎ出した直後、「Kさん、黒檜が大変低く見えるね」というSさんの問いかけに、Kさんが「夜は山は低く見えますよ」と答える会話にも現れています。

さらに、Kさんの話の中で、雪山での経験にもそのことが語られています。山に慣れたKさんも、月明かりの夜、雪が距離を近く見せ、どこが路か分からないような雪の中を這うように登っていくのですが、手の届きそうな距離がなかなか容易ではないのです。つまり、Kさんに見えている光景と実際の距離には大きな隔たりがあったのであり、一つ間違えば、そのまま眠り込んで死んでしまう危機の中をなんとか越えて峠を登り切ったとき、遠くの方に二つの提灯が見えて、それ

が、母親がよこした迎えの人たちだったというのです。この不思議な出来事にも、夜の自然が作り出す不思議な距離の変化が関わっているように見えます。Kさんが家に戻った後で聞いた話として語っているのは、母親が不意にKさんの義理の兄のUさんを起こして、Kが帰ってきたから迎えに行ってくださいと頼むのですが、その時、お母さんは、「Kが呼んでいるから」と言ったというのです。その話をするKさんに、「自分」の妻が、「Kさんは呼んだの？」と訊ねるのですが、Kさんは「いいえ、峠の向うじゃあ、幾ら呼んだって聴えませんが」と、そのことは否定します。だから、このことは、遠い距離だけれど、雪山の中で呼んでその声が実際に母親に聞こえたという、現実起こった現象ではないのです。それは、物理的な距離とは関係なく、一人の母親が子供の危機を察知するという不思議な現象であり、夜の自然の中で、距離というものが意味を失い、離れた者同士の思いが通じ合うというような不思議な現象を可能にする、そんな神秘的な力があることを、話を聞く者たち皆に、そして、読者にも納得させるのだと考えられます。そのことは、四人の中の唯一の女性である妻の涙にも現れているのではないでしょうか。Kさんの話を聞きながら妻は、Kさんの母親の思いを自分の思いと重ねて子を思う涙を流したのです。

赤城神社の神域内という場所が、女性を守り、その力を発揮させる場所であるということ、夜の不思議な自然の距離

感とが、Kさんの話に強い説得力を持たせています。この赤城神社の神域である赤城山という、女性を守る場で展開された一日の出来事は、四人皆に共有されながら、夕暮れから夜にかけての山の不思議な自然の中で、子を思う母なる女性の力が子供を危機から救う物語を紡ぎ出すのです。そして、父親の不実が母と子の絆を一層強くしたというKさんの話は、「自分」と父との不和が妻をも苦しめ、その傷ついた妻の心を癒やすためにこの赤城山にやってきた「自分」の心をも強く打ち、その思いを持つて、KさんとSさんの話を、改めて「自分」の視点で書くことによって、Kさんの不思議な体験のリアリティは、一層強くなるのです。

一読しただけでは、何気ない一日の出来事を時系列に沿って描写しただけに見える「焚火」という小説は、作者志賀直哉が、実際に赤城山に滞在しているときに書き始めてから五年あまりの時間をかけて周到に構築された言葉が、作品世界にリアリティを持たせ、さらには、リアリズムを越えた、神秘的な小説空間を読者に垣間見せる素晴らしい小説になっているのだと私には思われます。

「焚火」本文の引用は、『ちくま日本文学 志賀直哉』
(二〇〇八年筑摩書房刊) による

【編集後記】

雑誌を出すことにした。今時、雑誌を印刷して出すことにはそれほど意味があるかわからないが、角谷有一に話したら、書きたいものがあるという返事だったので、ふたりで始めることにした。毎年三冊発刊する予定である。

長年にわたりなじんできた小説や詩歌、批評、文学研究、社会思想、哲学、美術、音楽などあらゆるジャンルにわたり、書きたいことを書きたいように書く。それが現代の文学・思想・芸術の水準に見合うものであることを念じている。

昔から古本屋には世話になった。数冊の本を金に換え、その足で飲み屋の暖簾をくぐった学生であるから大した勉強もしたはずがなく、そんな後悔の念と「勉強」への郷愁が雑誌の発刊を後押ししたのかもしれない。

半世紀以上の読書生活で書棚の本もずいぶん増えた。学生時代に持っていた本はあらかじめ古本屋にもっていったので、古本屋でも値がつかない全集の端本などが残り、大半はその後に買い戻したものが多く、荷風全集しかりである。そんな中に、どうしても売らずに残ったのか不思議な本がある。例えば「谷川雁詩集」であり、例えば石原吉郎「日常への強制」である。愛読書といえはそのとおりであるが、古本屋へもつ

ていく確率でいえば相当に高く、(当時は)高く売れる本である。

日野研一郎詩集「俳優」もその一冊で、北川透が出していた「あんかるわ」に載った詩を見てこの詩人を知り、詩集を購入したと覚えている。少し引用してみようか。

なぜ夜の終わりに

はげしくよみがえる世界の埋葬があり

ながいためらいののちのように

おまえは消えかかる喪心をそだてはじめるのか

あかるさに立ちあがり

はじらうまでに拒むどのような世界が

おまえの鏡にゆがんでいたか

おお

静かなゆうぐれの出立から

追われるような朝の帰還へいたるおまえの

ちいさな戦慄よ いまはただ

ふりむこうとするな

日野研一郎「暗い場所から——半鎮魂歌・1973年——」

この詩集も、谷川雁や石原吉郎と同じに、たまに手に取ってページを繰る。蔵書に残っている古い本には、傷(トラウマ)のようなものがあつて、それが古本屋にもっていくのを無意識のうちに躊躇わせる遠因になったのかもしれない。(遠藤)

【会合案内】

合評会：2025 年 5 月 30 日(金) 於名古屋(予定)

Figures 2025年4月号 (No.1)

頒価500円

2025年4月30日発刊

編集発行人 遠藤雅樹

発 行 所 (有)デジタルリサーチ

〒460-0008 名古屋市中区栄2-10-19 名古屋商工会議所ビル11F

TEL：052-221-6616 / landsendlive@gmail.com

印 刷 (株)プリテックコーポレーション

Digital Research Institute, Inc.